

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520682
 研究課題名（和文） レッシュ集落立地論の誕生過程とそのナチ・ドイツ国土計画論への影響に関する研究
 研究課題名（英文） A Study on Building Process of Lösch's Location Theory of Settlement and Its Influence on the National Land Planning Theory of Nazi Germany
 研究代表者
 杉浦 芳夫 (SUGIURA YOSHIO)
 首都大学東京・大学院都市環境科学研究科・教授
 研究者番号： 00117714

研究成果の概要：Lösch がオリジナルな集落立地論を体系的に論じた 1940 年のテキストを精読するとともに、彼の集落立地論を立地・配分モデルによって定式化し、ハイデンハイム周辺の集落分布を Lösch モデルがいかに説明しうるかについて検討した。その結果、テキストの冒頭の記述が示唆するように、彼の故郷シュヴァーベンの集落分布の有様が彼の集落立地論の根底をなすことが分かった。また、彼の集落立地論の当時のドイツ国土計画論への影響を引用実態に基づいて考察したが、Christaller (1933)の中心地理論ほどの影響はみられなかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 人文地理学・人文地理学

キーワード： 中心地理論、ナチ・ドイツ、Lösch、国土計画、地理学史

1. 研究開始当初の背景

申請者は、この数年間、Christaller(1933)の中心地理論について、ナチ・ドイツ時代の国土計画論としての応用的側面を、その誕生の背景とも関係づけながら研究してきた(杉浦：2003a、2003b、2005、2006)。

申請者の一連の研究は、Christaller(1933)の中心地理論の誕生が、当時のドイツの時代性、そして彼の故郷である南ドイツ地方の地

域性と不可分な関係にあることを明らかにした点に大きな特徴があった。

地域を研究対象とする地理学の理論が、その提唱者が暮らした故郷や生活の場と密接に絡んでいることは Haggett(1990)がすでに指摘しており、申請者の一連の研究は、Christaller(1933)の中心地理論に即して、このことを実証したとも言えよう。

2. 研究の目的

申請者はさらにそのようなタイプの研究を進展させたいと考え、Christaller(1933)の研究の数年後に提唱されたLöschの集落立地論を対象にして、その誕生過程と、そのナチ・ドイツ国土計画論への影響について解明することを本研究の目的としている。

3. 研究の方法

(1) Lösch がオリジナルな集落立地論を体系的に論じた 1940 年のテキスト *Die räumliche Ordnung der Wirtschaft* と彼の日記を精読し、彼の集落立地論を再吟味するとともに、その誕生の経緯について考察する。Lösch は彼のテキストの冒頭において、故郷ハイデンハイムのある南ドイツ・シュヴァーベン地方での体験が、自己の集落立地論を構想するきっかけになったことに言及している。

(2) Lösch の故郷シュヴァーベンの集落分布の有様が、彼の集落立地論の根底をなすことをより客観的に実証するために、Lösch の集落立地論を立地・配分モデルによって定式化し、Lösch モデルがハイデンハイム周辺の集落分布をいかに説明しうるかについて検討する。

(3) 当時の国土計画論関係の論文が多く掲載されている *Raumforschung und Raumordnung*、*Neues Bauertum* を始めとする関連文献に目を通し、彼の研究の当時のドイツ国土計画論への影響を考察する。

4. 研究成果

ハイデンハイム周辺の集落分布を Lösch モデルがいかに説明しうるかについて検討した。ハイデンハイム周辺の 1930 年代の中心地分布図を、Christaller (1933) のデータから作成し、最低次中心地が六角形格子上に立地する場合と、四角形の格子上に立地する場合それぞれについて、Lösch タイプの集落立地モデルによって中心地の理論的立地パターンを求め、現実の立地パターンとの対応関係を検討した。

その結果、四角形格子上に中心地が立地する理論的パターンの方が、現実の立地パターンに近いことが分かった。これは、1940 年のテキストで、Lösch の集落立地論が、三角形の格子上のみならず、四角形の格子上での立地も前提にして論じられていることに符

合するとともに、故郷の集落分布の有様が理論構築に影響を与えていた可能性があることを示唆している。それ以外にも、四角形格子上での集落立地を考えるに至った契機が、訪問先のアメリカ中西部で見たタウンシップ制に基づく集落分布にあったことは言うまでもないであろう。

なお、Lösch の集落立地論のモデル化に際しては、効率的なアルゴリズム開発が今後の課題として残されている。また、本研究で十分なしえなかった、Christaller の中心地システムを特殊例として包括する、より完全な Lösch 集落システムのモデル構築も今後試みられるべきである。

また、彼の集落立地論が当時のドイツの国土計画論者の中で、一定の評価を受けていたこととの関連で、彼の研究の当時のドイツ国土計画論への影響を考察する点に関しては、在職したキール大学世界経済研究所の所長 Predöhl との間で、ナチ・ドイツの国土計画論に対する意見の相違があったことが日記の記述より判明した。両者の意見の対立が、経済立地論に対する方法論上の相違に起因することも考えられるが、これについては今後の検討課題である。

Lösch のオリジナル・テキストの発表が第二次世界大戦の最中ということもあってか、*Raumforschung und Raumordnung* と *Neues Bauertum* を見る限りでは、彼の集落立地論は Christaller (1933) の中心地理論ほどの影響をナチ・ドイツの国土計画論者たちに対して持ち得なかった。

しかしながら、集落立地論としての中心地理論の体系化という点からみた時、Lösch 集落立地論の 1940 年代 Christaller への影響は小さくない。何よりも、Christaller が 1941 年に書いた「空間理論と空間秩序」(Christaller, 1941a) という論文において、Lösch の 1940 年のテキストを中心地理論と同じ系譜に属する空間理論(集落立地論)として位置づけ、かつ大きな評価を与えている事実を見逃す訳にはいかない。Christaller への Lösch の研究の直接的影響は、Christaller が、1941 年に著した『東方領土における中心地とその文化・市場地域』(Christaller, 1941b)において、理論的な階層別の市場地域数や中心地間距離を推定させることを可能にする、K(重層因子)の用語を初めて用いていることに見て取ることができる。

K(重層因子)の用語は実は Lösch の 1940 年のテキストで提唱されており、Christaller

(1933)で用いられてはいない。Christaller (1933)では市場原理が作用した場合の(K=3の)中心地システムが専ら論じられており、交通原理が作用した場合のK=4の中心地システムや行政原理が作用した場合のK=7の中心地システムについては十分論じられていないのである。それゆえ、異なる中心地システムを識別するK(重層因子)という用語をあえて考えつく必要もなかったと思われる。とりわけ、行政原理が作用した場合の中心地システムについては検討途中であると言っても過言ではない。Christallerに、これら3原理に基づく中心地システムの空間パターンの違いをはっきり認識させたのがLöschの1940年のテキストであることは明らかである。

これを受けてChristallerは、これら3原理が同時に作用した場合の中心地システム、すなわち混合階層中心地システムの検討に向かい、それをナチ・ドイツが占領した東方植民地の集落再編計画に応用しようとしたのであった(Christaller, 1941b)。

さらに興味深いことは、1943年に出版された第2版のテキストにおいて、Löschが、第1版のテキストが出版された1940年以降に公刊されたChristallerの論文を引用していることである。それらはいずれも、東方占領地を対象とした論文である(Christaller, 1941b, 1942)。Löschの日記などからも分かることであるが、彼はナチ・ドイツに批判的であった。1940年代のChristallerの論文が目指そうとすることについてLöschはおそらく分かっていたはずであるが、そのことでChristallerの仕事を軽んじることはなかった。

これら相互の論文・著書を介してのアイデアの交流が、結果として、現在、中心地理論として一括総称される理論体系の完成に至った事実は、改めて確認されるべきであろう。

以上の研究は、Löschの集落立地論の理解を深めることに貢献するだけでなく、これまで独立になされてきた学史としての中心地理論研究と、中心地理論のモデリング研究の両者に接点を与え、中心地理論の総合的研究を推進することにつながるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

①石崎研二(2009):立地・配分モデルによるレッシュの市場地域論の定式化と中心地理論の一般化の試み. 杉浦芳夫編:『レッシュ集落立地論の誕生過程とそのナチ・ドイツ国土計画論への影響に関する研究(課題番号:19520682)』首都大学東京都市環境科学研究科地理学教室, 1-14.[査読なし]

②杉浦芳夫(2008):『南ドイツの中心』の書評をめぐって. 理論地理学ノート, 16(印刷中).[査読なし]

③石崎研二(2007):GIS・数理モデルによる集落分布の立地分析. 人文系データベース協議会第13回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」73-80.[査読なし]

[学会発表] (計 1件)

①石崎研二(2007):GIS・数理モデルによる集落分布の立地分析. 人文系データベース協議会第13回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」(於2007年12月22日奈良).

[図書] (計 2件)

①杉浦芳夫編(2009):『レッシュ集落立地論の誕生過程とそのナチ・ドイツ国土計画論への影響に関する研究(課題番号:19520682)』首都大学東京都市環境科学研究科地理学教室, 49p.

②杉浦芳夫(2008):『地理学の声』古今書院, 387p.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 芳夫 (SUGIURA YOSHIO)
首都大学東京・都市環境科学研究科・教授
研究者番号:00117714

(2) 研究分担者

原山 道子 (HARAYAMA MICHIKO)
首都大学東京・都市環境科学研究科・助教
研究者番号：00117722

石崎 研二 (ISHIZAKI KENJI)
奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10281239

(3) 連携研究者

なし